

親という二字

太宰治

青空文庫

親おやという二字と無筆の親は言い。この川柳せんりゆうは、あわれである。

「どこへ行つて、何をするにしても、親という二字だけは忘れないでくれよ。」

「チャンや。親という字は一字だよ。」

「うんまあ、仮りに一字が三字であつてもさ。」

この教訓は、駄目である。

しかし私は、いま、ここで柳多留やなぎだるの解説を試みようとしているのではない。実は、こないだ或る無筆の親あに逢い、こんな川柳などを、ふつと思ひ出したというだけの事なのである。

罹災りさいしたおかたには皆おぼえがある筈だが、罹災はさいをすると、へんに郵便局へ行く用事が多くなるものである。私が二度も罹災して、とうとう津軽の兄の家へ逃げ込んで居候いそうろうという身分になったのであるが、簡易保険だの債券売却だのの用事でちよいちよい郵便局に出向き、また、ほどなく私は、仙台の新聞に「パンドラの匣はこ」という題の失恋小説を連載する事になって、その原稿発送やら、電報の打合せやらで、いつそう郵便局へ行く度数が頻繁ひんぱんになった。

れいの無筆の親と知合いになったのは、その郵便局のベンチに於いてである。

郵便局は、いつもなかなか混んでいる。私はベンチに腰かけて、私の順番を待っている。「ちよつと、旦那、書いてくれや。」

おどおどして、そうして、どこかずるそうな、顔もからだもひどく小さい爺さんだ。大酒飲みには違いない、と私は同類の敏感で、ひとめ見て断じた。顔の皮膚が蒼く荒んで、鼻が赤い。

私は無言で首肯うなずいてベンチから立ち上り、郵便局備付けの硯箱すずりばこのほうへ行く。貯金通帳と、払戻し用紙（かれはそれを、うけ出しの紙と言っている）それから、ハンコと、三つを示され、そうして、「書いてくれや」と言われたら、あとは何も聞かずともわかる。「いくら？」

「四拾円。」

私はその払戻し用紙に四拾円也としたため、それから通帳の番号、住所、氏名を書き記す。通帳には旧住所の青森市何町何番地というのに棒が引かれて、新住所の北津軽郡金木町何某方というのがその傍に書き込まれていた。青森市で焼かれてこちらへ移って来たひともかも知れないと安易に推量したが、果してそれは当たっていた。そうして、氏名は、

竹内トキ

となっていた。女房の通帳かしら、くらいに思っていたが、しかし、それは違っていた。かれは、それを窓口に出し、また私と並んでベンチに腰かけて、しばらくすると、別の窓口から現金支払い係りの局員が、

「竹内トキさん。」

と呼ぶ。

「あい。」

と爺さんは平気で答えて、その窓口へ行く。

「竹内トキさん。四拾円。御本人ですか？」

と局員が尋ねる。

「そうでございせん。娘です。あい。わしの末娘でございます。」

「なるべくなら、御本人をよこして下さい。」

と言いながら、局員は爺さんにお金を手渡す。

かれは、お金を受取り、それから、へへん、というように両肩をちよつと上げ、いかにもずるそうに微笑ほほえんで私のところへ来て、

「御本人は、あの世へ行つたでございす。」

私は、それから、実にしばしばその爺さんと郵便局で顔を合せた。かれは私の顔を見ると、へんに笑つて、

「旦那。」と呼び、そうして、「書いてくれや。」と言う。

「いくら?」

「四拾円。」

いつも、きまつていた。

そうして、その間に、ちよいちよいかれから話を聞いた。それに依ると、かれは、案にたがわず酒飲みであつた。四拾円も、その日のうちにかれの酒代になるらしい。この辺にはまだ、闇の酒があちこちにあるのである。

かれのあとりの息子は、戦地へ行つてまだ歸つて来ない。長女は北津軽のこの町の桶屋に嫁いでいる。焼かれる前は、かれは末娘とふたりで青森に住んでいた。しかし、空襲で家は焼かれ、その二十六になる末娘は大やけどをして、医者の手当も受けたけれど、象さんが来た、象さんが来た、とうわごとを言つて、息を引きとつたという。

「象の夢でも見ていたのでございしょうか。ばかな夢を見るもんでございす。けえつ。」と言

って笑ったのかと思つたら、何、泣いているのだ。

象さんというのは、或いは、増産ではなからうか。その竹内トキさんは、それまでずっともう永いことお役所に勤めていたのだそうだから、「増産が来た」というのが、何かお役所の特別な意味でも有る言葉で、それが口癖になつていたのではなからうか、とも思われたが、しかし、その無筆の親の解釈にしたがつて、象さんの夢を見ていたのだとするほうが、何十倍もあわれが深い。

私は興奮し、あらぬ事を口走つた。

「まったくですよ。クソ真面目な色男気取りの議論が国をほろぼしたんです。気の弱いはにかみ屋ばかりだったら、こんな事にまでなりやしなかつたんだ。」

われながら愚かしい意見だとは思つたが、言っているうちに、眼が熱くなつて来た。

「竹内トキさん。」

と局員が呼ぶ。

「あい。」

と答えて、爺さんはベンチから立ち上る。みんな飲んでしまいなさい、と私はよつぽどかれに言つてやろうかと思つた。

しかし、それからまもなく、こんどは私が、えい、もう、みんな飲んでしまおうと思ひ立った。私の貯金通帳は、まさか娘の名儀のものではないが、しかし、その内容は、或いは竹内トキさんの通帳よりもはるかに貧弱であつたかも知れない。金額の正確な報告などは興覚めな事だから言わないが、とにかくその金は、何か具合の悪い事でも起つて、急に兄の家から立ち退かなければならなくなつたりした時に、あまりみじめな思いなどせず、にすむように、郵便局にあずけて置いたものであつた。ところがその頃、或る人からウイスキーを十本ばかりゆづつてもらえるあてがついて、そのお札には私の貯金のほとんど全部が必要のようであつた。私はちよつと考へただけで、えい、みんな酒にしてしまへ、と思つた。あとはまたあとで、どうにかなるだろう。どうにかならなかつたら、その時にはまた、どうにかなるだろう。

来年はもう三十八だというのに、未だに私には、このように全然駄目なところがある。しかし、一生、これ式で押し通したら、また一奇観ではあるまいか、など馬鹿な事を考へながら郵便局に出かけた。

「旦那。」

れいの爺さんが来ている。

私が窓口へ行つて払戻し用紙をもらおうとしたら、

「きようは、うけ出しの紙は要^いらないんでごいす。入金でごいす。」

と言つて拾円紙幣のかんりの束^{たば}を見せ、

「娘の保険がさがりまして、やつぱり娘の名儀でこんにち入金のもりでごいす。」

「それは結構でした。きようは、僕のほうが、うけ出しなんです。」

はなは

甚だ妙な成り行きであつた。やがて二人の用事はすんだが、私が現金支払いの窓口で手渡された札束は、何の事は無い、たつたいま爺さんの入金した札束そのものであつたので、なんだかひどく爺さんにすまないような気がした。

そうしてそれを或る人に手渡す時にも、竹内トキさんの保険金でウイスキーをかうような、へんな錯覚を私は感じた。

数日後、ウイスキーは私の部屋の押入れに運び込まれ、私は女房に向つて、

「このウイスキーにはね、二十六歳の処女のいのちが溶け込んであるんだよ。これを飲むと、僕の小説にもめつきり艶^{つや}つぽさが出て来るといふ事になるかも知れない。」

と言ひ、そもそも郵便局で無筆のあわれな爺さんに逢つた事のはじめから、こまかに語り起すと、女房は半分も聞かぬうちに、

「ウソ、ウソ。お父さんは、また、てれ隠しの作り話をおっしゃってる。ねえ、坊や。」
と言って、^は這い寄る二歳の子を膝^{ひざ}へ抱き上げた。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：ゆうい

2000年3月21日公開

2005年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

親という二字

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>